

緑爽会会報 No. 165

2019年12月25日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

～～《報告》～～

10月講演会報告

「日本山岳会草創期の二人・・・小島烏水と岡野金次郎について 二人のお孫さんを交えて」

開催日時：10月28日（月）18時～ 104号

出席者：会員20名、会員外12名（後掲写真参照。この他、南川・中條両会員も出席です。）

講師：神奈川支部 砂田定夫氏 四国支部 小島誠氏 緑爽会 渡邊貞信会員

緑爽会では2016年11月の山行で湘南平を訪ね、そこで神奈川支部の川俣俊一会員と、今回の講師である砂田定夫会員にご案内をいただいている。岡野金次郎碑前では砂田さんから貴重なお話を伺った。そんな経緯や、当会の渡邊会員が岡野金次郎の孫にあたることもあり、小島烏水のお孫さんである小島誠さんと一緒に、二人のお孫さんを交えたお話ができないかとの企画が持ち上がり、実現の運びとなった。（湘南平を訪ねた時の記録は会報147号参照）



緑爽会 10月講演会 日本山岳会草創期の二人・・・小島烏水と岡野金次郎について 2人のお孫さんを交えて

2019. 10. 28

小原茂延 高橋重之 荒井正人 柳田泰則 石塚嘉一 西谷隆亘 木村太郎 石田要久 西谷可江 小林敏博 下河辺史郎
鳥橋祥子 田口憲司 朝霞真実 渡部温子 瀬戸英隆 高橋郁子 川口章子 大島洋子 平野紀子 島田 稔
小泉義彦 古市進 相良泰子 関塚貞亨 小島 誠 砂田定夫 渡邊貞信 富澤克禮 松本恒廣

砂田さんから自己紹介後、小島さん、渡邊会員からも自己紹介として、小島烏水、岡野金次郎との繋がりについてお話があった。渡邊会員は家系図も用意された。

その後、砂田さんから小島烏水と岡野金次郎の出会いから日本山岳会設立に至る時代の、二人の関係、二人での登山、人となり、エピソードなどが話され、そこにお孫さんでしか知りえないようなエピソードを小島さん、渡邊会員から語っていただくといった形で進行していった。



講演される砂田定夫氏

二人の出会いは徴兵検査である。小島烏水（以下烏水とする）は長身瘦躯で丙、岡野金次郎（以下金次郎とする）はずんぐり短身で乙。二人とも不合格となることで、その後の交友が始まることになる。家も近く、毎晩のように会って話したり、芝居を観たり、あるいは、保土谷や戸塚を歩いたり円海山なども登っていたそうだ。金次郎はすでに丹沢尊仏山（塔ノ岳）に登っていたようで二人でも一緒に登り、後に乗鞍岳などの登山につながっていく。

二人の思い出について小島さん、渡邊さんが語ったのは、小島さんは烏水と会っているらしいが、まだ赤ん坊の時に記憶はないとのこと。渡邊さんは桜新町の盆栽園に金次郎夫妻がやってきたときには高校1年で、トヨ夫人は着物姿であったが、金次郎のいでたちには思わず「乞食みたい！」と声を出してしまったという。それは金次郎が身なりに無頓着だったということに他ならない。いつもそんな恰好で、毎日午前2時間、午後2時間の散歩をしていたが、金次郎が通ると何時と時間がわかるほどだったという。

二人が槍ヶ岳に登る計画を立てたころの話としては、烏水が山の状況を松本の役場に問い合わせたところ、危ないからやめた方が良くとの返事が届くが、それを母親が先に読んでしまい、そんな危ないことをする悪友とは付き合ってはならぬと言われたという。もっとも母には行先を偽って実行してしまうのだが。

金次郎は苦学して英語も身につけ、スタンダード石油で働くが、そこでウェストンの本を目にする。



渡邊会員

しかも調べると著者は宣教師として横浜に住んでいた。手紙を出して一人で会い、後に烏水とともに会いに行くことになる。そして日本にもアルパイン・クラブのようなものを作れと助言を得る。そうした点で行動力のある烏水は設立に向けて動く。しかし表立ったことを好まない金次郎は発起人の7人にも名を連ねていない。

それでも、砂田さんは金次郎が日本山岳会設立の導火線の役を果たしたと言われる。槍ヶ岳登山も金次郎の手助けがなければ為しえなかった。

また烏水が山岳会設立に向けて行動できたのには3つの偶然・出会いがあると考えているという。すなわち、烏水が志賀重昂の「日本風景論」に出会ったこと、金次郎との徴兵検査での出会い、そしてウェストンとの出会いである。タラレバは歴史にはないというが、大変興味深いことである。



小島誠氏

さらにいろいろなエピソードを聞くことができたが、最後に小島さんから詩吟をお聞かせいただいた。一つは、烏水の顕彰碑に刻まれている「山を讚する文」を最初の烏水祭で、即興で吟じたもの。

昨日の我は今日の我にあらず
今日の我はおそらく明日の我にあらざらむ
而してこれ向上の我なり
いよいよ向上して我を忘れ
程を遂いで自然に帰る

もう一つは、「令和」の典拠となった、「万葉集」巻五、梅花の歌32首あわせての序からの漢文の読み下し文。



詩吟を吟じる小島氏

(砂田さんから「先駆者たちの交友をめぐって」という資料を提供いただきました。資料の最後に「小島烏水と岡野金次郎の経歴対比表」があり、二人の関係や山歴などが大変わかりやすいものです。資料のご要望があればお送りしますので、荒井までお申し出ください。)

1 1月山行報告「奥多摩むかし道」

実施日：11月15日（金）

参加者：会員12名とガイドの東京多摩支部の石井秀典さん

渡部温子、平野紀子、鳥橋祥子、大島洋子、島田稔、小清水敏昌、富澤克禮、夏原寿一、瀬戸英隆、田井具世、川口章子、渡邊貞信

台風19号により日原への道路が崩壊し、当初の予定を変更して行われたが、好天に恵まれて、歴史・文化に触れることのできた山行となった。サブリーダーの渡邊さんの報告です。

奥多摩むかし道を歩く

渡邊 貞信

久しぶりに訪れた青梅線奥多摩駅は駅舎が改装されて、2階にレストランを設けた洒落た駅舎になっていた。

穏やかな小春日和の天気にも恵まれ全員集合、早速、東京多摩支部の奥多摩BCに向かい、本日のガイドをして頂く地元大ベテランの石井様にご挨拶し、オリエンテーションの後身支度を整え出発。

今日の行程は奥多摩氷川村から小河内村に至る「旧青梅街道」。その昔は更に足を延ばして大菩薩峠を越えて甲府に至る甲州裏街道で昔から旅人が通った道。

今回はその街道沿いに伝わる歴史文化、民話等を知り、普段そのまま通過したら何の変哲もない普通の街道を石井さんの適切なガイドで沢山のことを学びながら歩き、大変有意義な旅となった。

折からの紅葉が始まり杉の植林の緑と対称に橙、黄色に染まった山容が映える美しい風景の中、全員元気に歩を進めた。歩き始めて直ぐに昔小河内ダム建設時に資材を輸送したというSLも通ったことのある軌道がそのまま残っていて時代の流れを感じた。さて、ビジターセンターから峠まで70mの登り。約20分で槐木（さいかちぎ）に到着。マメ科の巨樹で昔から良い目印になった木があり、ここで一休み。

更に進み「不動の上滝」で丁度正午となり、ここで昼食。天気が良いので各自地面に座り昼食休憩。ウィークデーの為他の登山客は少なく貸し切り状態だ。トイレはこの場所を含めて何処も地元の係の方が毎日のように清掃されていて綺麗で気持ちよく利用できる有難かった。

昼食を終えて更に進むと、大昔、地元の豪族三田氏と武田氏の領地の境にあたる場所“境”を通り過ぎてトレイル脇の急な石段を上り詰めると白髭神社に着いた。

東京都の天然記念物で秩父古生層の石灰岩断層が露出した大岩に守られるように社殿があり、祭神は「塩土翁神（しおつちのおきな神）」と言われ、神武天皇に麗しき国大和をお勧めしてご案内した神と言われているそうだ。ここで全員での記念写真撮影、ラッキーなことに我々の後から上がってきた外人のカップルにカメラのシャッターを押してもらえた。



この多摩川北岸の「奥多摩むかし道」は、今は歩きやすい道

に整備されているが、大昔は急峻な多摩川の流りに沿う道幅の狭い難所続きの街道で、道端には道路や旅人への悪鬼邪心を防ぐ神への信仰の証である道祖神としての石像が有る。また、人が通れる幅しかない狭い旧道では多くの馬が谷に落ちたといわれ、その度に供養塔が増えていったという。さらに難所にさしかかった材木を運ぶ牛馬の通行の無事息災を祈った「牛頭（ごず）観音」などがあり当時の状況が容易に想像できる遺産がある。

街道沿いに住んだ人達は当時医者がいなかったの、歯痛の時には煎った大豆を備えて平癒を祈った「虫歯地蔵」が、また、耳垂れや耳痛の時には穴の空いた小石をそなえて一心に祈った「耳神様」等もあり当時の生活の状況が分かる。

街道を旅する旅人は馬の水呑み場に馬を休ませ、近くの街道沿いの家でお茶を飲んで休憩したといわれる。

今回、その街道沿いの家に住んでいるお年寄りのおばあちゃんにお会い出来た。

既に冬に向けて薪割りを済ませて沢山の薪が整然と家の周囲に積まれていた。山間の地ではもうこれからの季節に備えてしっかり準備が出来ていた。



そこに住まわれているおばあちゃんがとても気さくな方で家の中も見せてくれた。広い部屋の真ん中にある昔からの囲炉裏の中心には薪ストーブを設置してあり、暖をとったりお料理を作っているとのことだった。別れ際には柚子まで頂き皆感激した。なかなか、人と人の触れ合う機会の無

い環境のなかでおばあちゃんも嬉しかったみたいで良かった。

河合玉堂の歌碑を見ていよいよトレイルの終点、「西久保の切り返し」まで来たが、この先浅間神社を経て奥多摩湖方面へのルートは台風19号による被害で通行できず、ここで折り返して最寄りの「桃ヶ沢」バス停より奥多摩駅に戻った。

立川駅でご苦労さん会をして解散、お疲れ様でした。

(参考) 行程記録

青梅線立川発8:11⇒奥多摩駅9:30集合

奥多摩BC(9:40~10:15)⇒むかし道入口(10:25)⇒羽黒坂(10:30)⇒
槐木(10:45)⇒不動の上滝(12:00~12:35昼食)⇒白髭神社(12:55~1
3:10、集合写真撮影)⇒弁慶の腕抜き岩・耳神様(13:15)⇒いろは楓(13:20)⇒
薪積み重ね民家(13:40)⇒惣岳の成田不動尊(13:45)⇒惣岳溪谷(13:50)⇒し
だら溪谷(13:55)⇒馬の水飲み場、牛頭観音様(14:15)⇒虫歯地藏(14:20)
⇒玉堂歌碑(14:25休憩)⇒西久保の切り替えし(14:30休憩)・・・この先、奥多摩湖
方面は道路損壊の為通行不可・・・⇒桃ヶ沢バス停(15:10)・・・15:28発バスに乗車・・・
奥多摩駅(15:45)・・・青梅線16:08発に乗車⇒立川駅(17:15)、解散

年次晩餐会速報

12月7日(土) 於:京王プラザホテル

令和となって初めての年次晩餐会が、天皇陛下のご臨席を賜って盛大に開催されました。

午後1時から講演会及びアルパインフォトクラブの写真展示、日本山岳会の自然保護活動の歴史や取り組み状況のパネル展示、図書委員会による図書交換会も行われました。

午後5時半頃より天皇陛下は写真展示と、自然保護関係のパネル展示をご覧になりましたが、緑爽会の川嶋新太郎会員が写真を、松本恒廣会員が自然保護関係を陛下にご説明をされました。

陛下は今年の台風で山がどんな状況になっているかについても関心がおありだったということでした。

忘年会速報

12月21日(土) 13時~ 集会室

令和初の忘年会が25名の出席で開催されました。

会に先立って山形支部の佐藤淳志会員より「鳥海山のイヌワシ保護の現状について」という題でお話をいただきました。詳細は次号にてお知らせいたします。

なお、前164号の予告欄にて、佐藤会員のお名前を誤って敦史と表記してしまいました。正しくは淳志さんです。訂正してお詫び申し上げます。

「山の本」秋号・緑爽会と川崎精雄さん

吉田 理一

季刊誌「山の本」秋号（2019年9月15日、No.109、白山書房刊）に荒井正人さんの「山もよう人もよう」の第2話が掲載されている。私が越後駒ヶ岳の9合目にある駒の小屋の管理人をしていた2016年10月に登って来られて宿泊された時の事も触れてあるというので久しぶりに「山の本」を通読してみた。

荒井さんの随想に添えられているカットに目を奪われた。駒の小屋から山頂に続く稜線から駒の小屋を見下ろす場所からのスケッチであった。

「Y」のサインが入っていた。早速荒井さんに「Y」さんを探ねたら中村好至恵さんとの事だった。数年前地域限定記念切手が発行された際の駒の小屋の写真もあの場所からの撮影だった。写真家にしる画家にしる芸術家の見る目は鋭いと思った。山屋にとって山小屋の管理人を体験する事は一つのロマンである。あの場所からの駒の小屋の風景は一生の思い出であり忘れることは無い。



「山の本」109号（秋）より転載（中村好至恵・画）

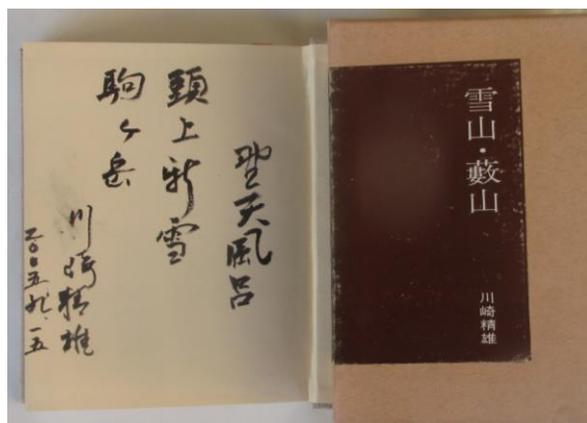
「山の本」秋号には荒井さんの他に高辻謙輔・中村好至恵・長沢洋・南川金一さんが連載記事を寄稿されていて緑爽会会員の健筆ぶりが窺い知れる。

随想の荒沢岳登降の文中に「川崎精雄氏の紀行を思い浮かべながら・・・」とある。「雪山藪山」（昭和44年2月、茗溪堂刊）所収の昭和6年8月の紀行文の事を指しているものと思われる。さらに大津雅光さんの「秋山郷と仁成館」は、昭和15年に川崎さんが宿泊した際の宿泊記録が残る宿帳を見るために96才の川崎さんが平成15年に仁成館を訪れた事を偶然知り、詳しく報告文を載せている。

川崎さん一行7名は仁成館訪問の前日平成15年10月6日は六日町ユースホテル泊であった。六日町 YH の内山功一支配人は日本山岳会会員(現在離籍)であり、一行の中に緑爽会の早川瑠璃子さんもいらした関係で私も案内をいただき六日町 YH に宿泊し懇親会に出席する機会をいただいた。懇親会は支配人の私邸である六日町君帰の沖縄料理専門店「縄文亭」が会場であった。あれから16年が過ぎ一行7名のうち川崎さんをはじめ片岡博・高田真哉・早川瑠璃子の4名が他界されている。

懇親会の席は川崎さんと初対面の私が沢山お話が出来ると幹事さんの計らいで川崎さんと向き合いの席を用意して下さった。「雪山藪山」「山を見る日」等の蔵書を話題にしたところ今度会ったときに署名をすると話された。斗城の俳号を持つ俳人でもある川崎さんは色紙「藪こぎの彼方新雪 会津駒 斗城」をプレゼントして下さった。

平成17年9月14日、銀山平伝之助小屋の主人(越後支部会員)からFAXが入っていた。「川崎さんが見えているが小出町の吉田さんと連絡が取れないでいる」との内容だった。翌日ランプの宿「駒の湯山荘」に伺って署名をしていただいた。著書「雪山藪山」には「露天風呂 頭上新雪 駒ヶ岳」と一句をしたためていただいた。



川崎さんの著書は「山の句集 冬木群」(表紙写真は川崎さん撮影の未丈ヶ岳)、「静かなる山 正・続」等を持参して伺ったが特に「雪山藪山」と「山を見る日」の限定版は保護函に入れたまま蔵書としていた。「お父さんの本をこんなに大切にしてくださって」とむしろ同行のお嬢様の方が感激されていた、川崎さん98才であった。

平成20年10月の緑爽会例会は座談会「静かなる山」だった。中西章、横山厚夫、山田哲郎の3名を迎えて開催された。川崎さんのお姿があつて当然の座談会であつたが川崎さんはその2ヶ月前の8月、101才の天寿を全うされた。

※越後支部機関誌「越後山岳第11号」(2007年5月・越後支部発行)には「川崎精雄著『雪山藪山』との出会い」と題した私の随想を載せていただいている。

【訂正】*****
<163号の訂正>

6月山行報告「山研に泊まって上高地を散策」の中で、以下の通り誤りがありました。編集者の聞き間違いに依るもので、お詫びして訂正させていただきます。

- ① 「小梨平にテントを張って信大、深志、県(あがた)などの高校生と一緒に寝た」と記しましたが、「信大や各高校ごとに50人テントを張った」が正しく、集団登山の時等は、各テントに分宿した、ということでした。
- ② 「昭和30年になると一年おきでウェストン祭をするようになった。その後毎年開催」とあるのは誤りで、「昭和23年から毎年ウェストン祭が開催されていて、最初は担当旅館が一年ごとに変わった。まだそんなに沢山の人が来なかったこともあり大変だった。それでその後は西糸屋が10年余り続けて担当した」が正しく、付記すれば、「後に徐々に人が来るようになり5年ごとの持ち回りとなり、今年からは3年ごととなる」ということでした。

<164号の訂正>

近藤緑さんの寄稿「ナイロンザイル切断事件あれこれ」につき、ご本人より、以下の誤りについての訂正とお詫びがありましたので、ここに掲載します。

- ① 6ページ上から3行目「高井利恭会員の『奥又合宿備忘録』とあるのは「上田定夫会員(旧制神戸中学教師)の『奥又合宿備忘録』」
- ② 同5行目「神戸のミニ百貨店の社長だった」は「神戸のダイマツヤ洋品店の社長だった」
- ③ 同下から3行目「・・ご子息の筑波大ラグビー部での先輩だった」は「順天堂大サッカー部での先輩だった」

